

武良茂(水木 しげる)の戦争体験

開催主旨

今年には終戦 80 年となる節目の年であり、戦争体験を後世に伝えていくことは、ますます重要な課題となりつつあります。1945(昭和 20)年 8 月 15 日の終戦から長い年月が経過した今、戦傷病者やその妻が、どのような戦争体験をしてきたのかを振り返り、考えていくことも、戦争を経験していない私たちの役割となっています。

本展では、戦傷病者であり、著名な漫画家である水木しげる(本名:武良茂)氏の、戦地パプアニューギニアでの軍隊生活と受傷病、現地の人びととの交流や、代表作『総員玉砕せよ!!』、『昭和史』などの作品に描かれることとなった水木氏の戦争体験について紹介します。

水木氏の描いた作品や言葉を通して、氏の体験した戦争について考えてみませんか。

主 催	しょうけい館(戦傷病者史料館)
会 期	令和 7 年 6 月 3 日(火)~10 月 13 日(月)
会 場	しょうけい館 2 階企画展示室
入 館 料	無料
開 館 時 間	10:00~17:30(入館は 17:00 まで)
休 館 日	毎週月曜日・7 月 22 日(火)・8 月 12 日(火)・9 月 16 日(火) ※7 月 21 日(月)、8 月 11 日(月)、9 月 15 日(月)は開館
問い合わせ先	しょうけい館 TEL:03-3234-7821 担当:半戸 取材を希望される際は事前に連絡をお願いします。

※無断転載禁止

※原画、原資料の展示はありません。

展示資料の概要



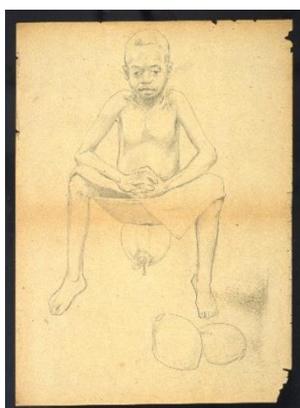
写真「背広の父と」



「軍装の兄と」



「マラリアと負傷でフラフラと歩く」



スケッチ「椰子の実に腰かける少年」



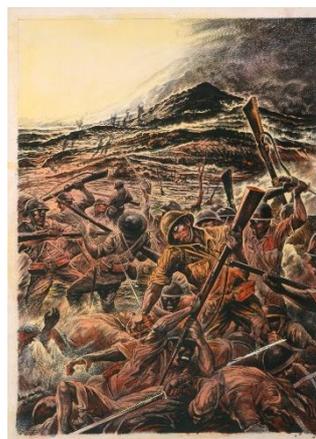
スケッチ「負傷した兵長」



写真「国立相模原病院にて」



『昭和史』第4巻原画



『昭和史』第5巻表紙原画

©水木プロダクション

映像上映

内容：水木しげる・布枝ご夫妻の証言映像を上映します。

場所：しょうけい館 2階シアター

※ 団体プログラム等によって、上映内容を変更・休止する場合があります

映像タイトル	時間
武良茂(水木しげる)にとっての戦傷	21分
水木さんとともに歩んだ“ゲゲゲの女房” ～いつもそばにいてくれた～	20分

しょうけい館証言映像展

証言がつなぐ あの日の記憶

開催趣旨

戦後80年を迎えた今年、戦争を体験した世代の高齢化は進み、いよいよ戦争体験者不在の時代が到来しつつあります。戦争体験の継承がますます重要な課題となる中で、彼らの体験を知る方法の一つに、証言映像があります。

当館は、戦傷病者やそのご家族、軍医や従軍看護婦などの医療関係者などを対象に、これまでに約200本の証言映像を収録してきました。証言映像は、体験の内容はもちろんのこと、それを語りかける表情に至るまで記録されているため、より実感をもって彼らの体験や思いに触れることができます。

本展では、映像を収録した証言者をパネルで紹介するほか、証言者から寄贈された資料を展示します。また、証言映像の上映も行いますので、ぜひ生きた声を通して戦傷病者について知ってもらえればと思います。

主催	しょうけい館(戦傷病者史料館)
会期	令和7年10月15日(水)～令和8年3月1日(日)
会場	しょうけい館 2階企画展示室
入館料	無料
開館時間	10:00～17:30(入館は17:00まで)
休館日	毎週月曜日・令和7年11月4日(火)・11月25日(火)・12月28日(日)～令和8年1月4日(日)・1月13日(火)・2月24日(火) ※令和7年11月3日(月)、11月24日(月)、令和8年1月12日(月)・2月23日(月)は開館
問い合わせ先	しょうけい館 TEL:03-3234-7821 担当:西尾 取材を希望される際は事前に連絡をお願いします。

※無断転載禁止

展示内容

当館がこれまでに証言映像を収録した戦傷病者証言をパネルで紹介するとともに、証言者から寄贈された資料を展示します。

義手(装飾用義手)

右腕を切断した戦傷病者が使用していた義手。この方は自身の左腕一本で仕事をすることができましたが、仕事の時や歩行のバランスを取るためにも義手が必要でした。



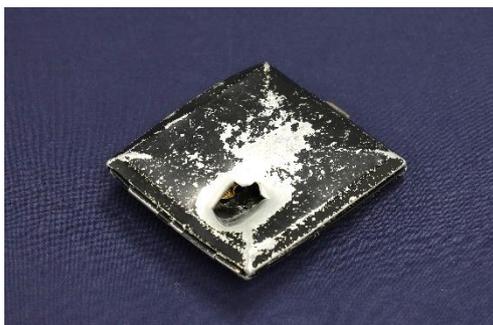
足補助器具

脚の長さを補うための補装具。これを使用していた戦傷病者は、手術により右脚が6cmも短くなってしまったため、脚の高さを揃えるために使用しました。



煙草ケース

戦闘で負傷した際にズボンのポケットに入っていた煙草ケース。銃弾は金属製の煙草ケースを貫通し、太ももの骨を砕く重傷を負わせることとなりました。



義眼

両目を負傷した戦傷病者が使用していた義眼。箱に書かれている「御賜」の文字は、この義眼が皇室より賜ったものであるということを示しています。



尺八

脊髄損傷の戦傷病者が、箱根療養所への入所中に製作した尺八。この方は出征前に竹材を扱う店で奉公していたこともあり、半身不随でありながらも器用に工芸品を製作することができました。



義指

凍傷で失ってしまった戦傷病者が指を補うために使用していた義指。装飾用であり、使用しても指としての機能が得られる訳ではないため、この方が元々していた車掌の仕事を諦め、戦後は新しい仕事を探さざるを得ませんでした。



バール、げんのう、ヤスリ

両腕を切断した戦傷病者が戦後に使用していた大工道具。この方は、特殊な手術を受けたことで物を挟んで持てるようになり、不自由な腕でありながらも大工道具を器用に使いこなし、建物に板を張るくらいの作業はできたそうです。



義手

右手を失った戦傷病者が戦後に使用していた義手。この方によれば、日常生活や仕事では着けているとかえって邪魔になるため、あまり使用しなかったそうです。



証言映像上映

内容:企画展で紹介している戦傷病者の証言映像を順次上映します。

場所:しょうけい館 2階企画展示室内

映像タイトル	時間
人間の尊厳の回復につくした生涯	33分
家族の絆で支え合う	16分
二人で一人、傷痍軍人の妻として	10分
失明の夫を支えて	19分
がむしゃらに生きて、描く	18分
療養所は大きな家族～支えあい、助けあい～	10分
受傷した身にまた召集が	10分
義足と妻に支えられて	24分
生きる・・・それは死ぬよりつらかった	10分
努力家の夫を信じて～失明の夫とともに～	18分
16歳で右手を失って	15分
シベリア珪肺～今も続く後遺症～	19分
小学校を出て先生に	16分

総集編映像上映

内容:これまでに当館が収録してきた証言映像を、テーマごとに再編集した総集編映像を上映します。

場所:しょうけい館 2階シアター

※団体プログラム等によって、上映内容を変更・休止する場合があります。

戦傷病者と結核

—軍隊での罹患から戦後の闘病生活まで—

開催趣旨

結核は、結核菌という細菌に感染することで発症する病です。「国民病」「亡国病」ともいわれた、昭和期を代表する感染症といっても過言ではありません。結核感染の広がり国民生活の中だけでなく、軍隊でも大きな問題のひとつでした。

本展では、結核にかかった戦傷病者の人生に焦点をあて、軍隊生活の中でどのように結核を発症してしまったのか、そして戦中・戦後の闘病生活の様子と、結核という病と闘いながら過ごした人生の労苦を、戦傷病者と家族のあゆみから辿るとともに、軍隊結核に関連する資料や、結核の療養所についても紹介します。

本展を開催するにあたり、清瀬市郷土博物館、公益財団法人結核予防会、砂町文化センター(石田波郷記念館)、独立行政法人国立病院機構東京病院より協力をいただきました。

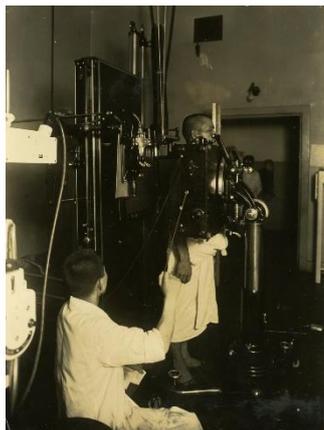
主催	しょうけい館(戦傷病者史料館)
会期	令和8年3月3日(火)~5月31日(日)
会場	しょうけい館 2階企画展示室
入館料	無料
開館時間	10:00~17:30 (入館は17:00まで)
休館日	毎週月曜日・5月7日(木)・5月17日(日) ※5月4日(月)は開館
問い合わせ先	しょうけい館 TEL:03-3234-7821 担当:半戸 ※取材を希望される際は事前に連絡をお願いします。

※無断転載禁止

展示構成

結核と軍隊での体験

国策として結核予防対策が掲げられている時代、徴兵検査での結核罹患者の発見、軍隊生活における結核の予防は、常に一定数の兵員を確保しなければならない軍にとって大きな課題のひとつでした。ここでは、結核について、軍隊における結核予防策、軍隊生活で結核を患った戦傷病者の労苦を紹介します。また、当時の治療法などについても解説します。



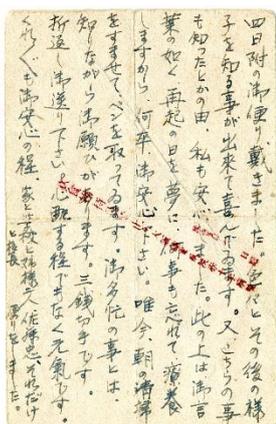
レントゲン機器

レントゲン撮影の様子。徴兵検査における結核罹患者の早期発見と、軍隊内部での集団感染を未然に防ぐための対策は、軍にとって極めて重要なことでした。



『戦争と結核』

昭和18年発行の戦争と結核について記された、およそ20センチ厚、1280ページにもなる本。軍隊での感染患者の収容体系なども知ることができます。



父親に宛てた葉書

入隊後、結核が再発して療養所で生活することになった戦傷病者が、父親に宛てたもの。療養に専念するので、心配しないで欲しい旨を記しています。



肺のレントゲン写真

海軍に志願、レイテ沖海戦では助かったものの、疲労のために結核にかかってしまった戦傷病者のレントゲン写真。結核治療で片肺を切除したことがはっきりと映っています。

戦傷病者と文学

結核を題材とした文学作品は数多くあり、その時代の実像に迫ることができます。ここでは、結核を扱った文学や、著名な俳人である石田波郷について取り上げ、波郷の肺手術で用いられた資料を展示します。



『病鴈』

俳人であり、戦傷病者である石田波郷の句集。昭和18年の出征から、発病して20年3月に内地還送されるまでに詠んだ句が収められています。このほか『惜命』なども展示します。



『とろ火』、『療養と短歌』

結核を患った元陸、海軍人による作品集。療養患者によって多くの短歌や俳句、随筆などが世に出されました。こうした作品からも、患者の心情や当時の様子などを知ることができます。

療養生活から社会復帰まで

戦時中から戦後にかけて、結核は空気の清浄な環境で安静に過ごし健康を取り戻していく“静養”をおこなう方法が主流でした。このほか人工気胸療術や、外科療法もおこなわれ、戦後になると化学療法が取り入れられ、結核の治療法は進歩していきました。ここでは、結核の療養所、療養方法、軍隊で結核となり入院、療養生活を送った戦傷病者の労苦を紹介します。



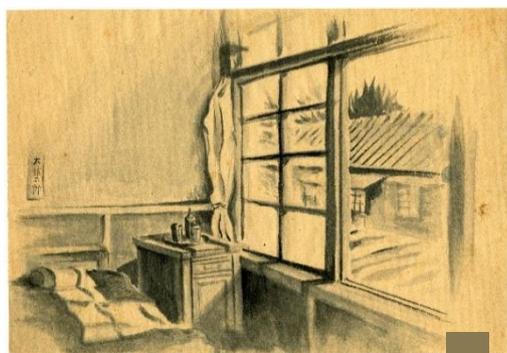
傷痍軍人広島療養所

終戦までに設けられた約 50 か所の傷痍軍人療養所うち、36 か所を結核療養所が占めていました。写真は、傷痍軍人広島療養所の病室と、新鮮な空気を吸って静養するための外気舎。



国立東京療養所

戦後、傷痍軍人療養所は国立療養所に転換され、引き続き結核の患者を受け入れてきました。写真左は、傷痍軍人療養所時代から昭和 41 年まで使われた外気舎(清瀬市指定文化財)、写真右は国立東京療養所の医師が戦後の療養所について記した本。

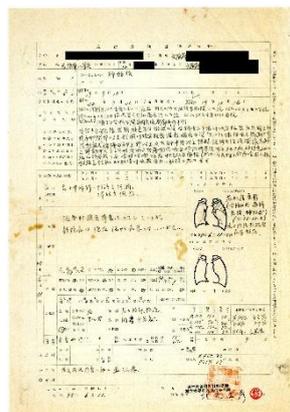


戦傷病者の作品

傷痍軍人青森療養所に入所した戦傷病者が描いた風景画。化学療法が登場するまで、患者は長い療養生活を送らなければなりません。

戦傷病者を支えた妻

結核が治る病となってからも、地域社会の中では結核への恐怖から罹患者に対する偏見は根強く残っており、そこで生活する家族は肩身の狭い思いをせざるを得なかった現実がありました。そのような中、結核となった戦傷病者の妻たちは、夫の看病をしながら一家の働き手となって家族を養い、地域社会で暮らしてきました。ここでは、妻たちの労苦、家族の労苦を紹介します。



肺結核の診断書

肺結核を患った戦傷病者の診断書。この戦傷病者の長女は、力仕事は母が全てこなしていたこと、子どもたちを進学させるために仕事と家事を一手に引き受けていたことなど、母の労苦を綴っています。

映像上映

内容:企画展に関連する映像を上映します。

場所:しょうけい館 2階シアター

※団体プログラム等によって、上映内容を変更・休止する場合があります

	映像タイトル	時間
10:00 } 11:00	★すべてめぐり合わせとって	22分
	熱砂の抑留生活	21分
	終戦から始まった30年の闘い～銃創と結核～	13分
11:00 } 12:00	★シベリア抑留、そして結核・・・それを支えた妻	17分
	戦病の夫に代わって～戦中・戦後の開拓人生～	21分
	全てを受け入れて ～肺結核の夫を支える～	17分
12:00 } 13:00	★戦病者として生きる	15分
	筆舌に尽くせぬ苦しみの日々	10分
	誠(まごころ)で守られた命—ニューギニア戦線にて—	18分
	二度の撃沈、受傷、そして発病・・・	10分
13:00 } 14:00	★シベリア抑留、そして結核・・・それを支えた妻	17分
	戦病の夫に代わって～戦中・戦後の開拓人生～	21分
	全てを受け入れて ～肺結核の夫を支える～	17分
14:00 } 15:00	職業軍人を目指した父がみた現実	16分
	憲兵から捕虜となって	24分
	海軍看護兵 若き日の記憶	15分
15:00 } 16:00	★シベリア抑留、そして結核・・・それを支えた妻	17分
	戦病の夫に代わって～戦中・戦後の開拓人生～	21分
	全てを受け入れて ～肺結核の夫を支える～	17分
16:00 } 17:00	★すべてめぐり合わせとって	22分
	四肢を火傷・・・二度と操縦桿を握れなかった	14分
	衛生兵ゆえの感染	11分
	筆舌に尽くせぬ苦しみの日々	10分

・★のついた証言者の寄贈資料は、本企画展で展示します。

・各証言映像は上映時間以外でも、情報検索端末で視聴できます。